

松本清張『霧の旗』における女性像

孫, 平

九州大学大学院地球社会統合科学府 : 博士後期課程一年

<https://doi.org/10.15017/4103506>

出版情報 : 九大日文. 34, pp.51-63, 2019-10-01. 九州大学日本語文学会
バージョン :
権利関係 :

松本清張『霧の旗』における 女性像

孫平

を占めている。

また、清原康政も、この作品を「社会派推理小説から、『日本の黒い霧』など一連の政治的、社会的な事件をとりあげるようになっていった作者の軌跡の、架橋的な位置を示す作品」^①であるとしている。尾崎・清原の両論とも、『霧の旗』を架橋的な作品と位置付けている点で共通している。

一、はじめに

『霧の旗』は松本清張が『婦人公論』の一九五九年七月号から翌年三月号まで九ヶ月にわたり連載した長編小説である。尾崎秀樹は、『霧の旗』新潮社版単行本（一九七二年）の解説において、この作品を次のように評価している。

『霧の旗』を発表した昭和三四年には、（引用者注…松本清張は）さらに戦後史の黒い影を描いた一連の作品の先駆となる『小説・帝銀事件』を書き、スチューワーデス殺人事件に材をとった『黒い福音』を手がけ、次第と政治的・社会的諸事件をあつかうようになってゆく。そうみてくると、『霧の旗』の書かれた昭和三四年、五年という年は、松本清張のあぶらののりきったときであり、その方向が定められ、さらにつぎの段階へ歩みだそうとするちようどそのときに当たっていたことがわかる。『霧の旗』は実際に松本清張の作品史の上において、つぎの時代へ架橋するような位置

昭和三〇年代清張作品に登場する女性を論じる際には、女性の「身体」と「性」の表象は見過ごすべきではない。幾つかの先行論では、こうした表象が重要視されている。例えば、飯田祐子は、「女」が性と感情の生き物であるという図式は、今でこそ陳腐でしかも政治的に正しくないのだが、清張の世界では、この図式が全く疑われぬ強さで生きている」^②と論じている。石川巧は飯田の論点を引き継ぎ、清張の幾つかの初期作品を取り上げ、デビュー当時から昭和三〇年代前半の清張ミステリーに登場する女性に焦点をあてた。石川は、「夫から（性）的身体として慰撫されることもないまま悶々とした日常を生き、やがてその鬱屈した感情を復讐へと転化させていく女たちは、まさに昭和三〇年代前半の清張ミステリーの（空白）を埋める最後のピースであり、そのピースがもつ心の闇の深さとバリエーションの多様さによつて、彼（引用者注…松本清張）のミステリーは他の追隨を許さぬ圧倒的なリアリティを持ちえたのである」^③として、「女の身体における（性）の痕跡という問題」に對する清張の「辛辣な認識」を語っている。

橋本忍は角川文庫の解説において『霧の旗』は、特異的な一風変わった面白さを持つ」と指摘し、さらに、同作品の面白さについて、「主役として登場してくる桐子という、女の像の特異性である。この少女からやつと女に転移しはじめたばかりの桐子は、今までの日本の文学にはかつて一度も登場してこなかった、全く新しい型の人物である。その動きは実に新鮮で、不思議な魅力がある」⁽⁴⁾と述べ、これまでの清張作品に登場した女性と比較すると、桐子は「もつと毅然としている。もつと強い、なにかもの悲しいまでに、厳しいものを感じさせる」と評している。一方で、天沢退二郎は視点人物の転換を分析することを通して、「大塚や阿部の視点から、桐子が観察され、大塚や阿部の意識に語りが入り込んでいるときにのみ、「柳田桐子」という女性の《毅然》とした、《厳しい》、頑固で鮮烈で、冷徹なイメージと行動が表出されるのであって、桐子の視点から世界が見られ、あるいは桐子の意識や心理が語りによって言及されるときは、決してそうでないということなのである」⁽⁵⁾と論じ、橋本の解説と同じように、桐子の「毅然」、「強い」、「厳しい」などの性格特徴を指摘し、さらに、それが他者に観察される桐子の特徴であることを指摘している。しかし、主人公桐子をめぐる「桐子の視点」、「桐子の意識や心理」、「桐子の行動」から読み取れる桐子の特徴についてはまだ明らかにされていないと言える。

本稿では先行論で指摘された女性の「身体」と「性」についての問題意識を共有しつつ、先行論で十分に論じられない掲載

誌自体の論調と単行本掲載時における改稿問題に着目し、『霧の旗』において提示された新しい女性像について明らかにしたい。

二、一九五〇年代後半における『霧の旗』

小説のあらすじを述べると次のようになる。

小学校教師柳田正夫は金貸しの老婆殺人事件に巻き込まれ、警察段階においては、いったん犯罪を自供したものの、検察庁でその自供を翻し、罪状を否認する。柳田正夫の妹、柳田桐子は兄の無実を信じ、はるばる九州のK市から二〇時間もかけて上京し、無実の被告を救ったことで有名な弁護士、大塚欽三の事務所を訪ね、兄への弁護を求める。しかし、弁護料の問題や、個人的な事情で急いでいた大塚は、桐子の依頼を断る。現場に指紋の存在したこと、柳田正夫の借用証書だけが現場から欠如している点、およびズボンについた被害者の血痕と殺人現場の灰などの証拠により、柳田正夫は公判廷の一審で死刑の判決を受け、控訴中に強盗殺人犯の汚名を負ったまま獄死した。「論想社」編集部の記事である阿部啓一は、桐子が大塚弁護士にかけていた電話を偶然耳にし、事件に興味を持つようになる。阿部は独自の調査を行い、大塚弁護士が柳田正夫の無罪を裏付ける証拠を見つけた可能性があることを桐子に伝える。大塚弁護士には銀座でレストランを経営している河野径子という愛人がいた。径子は桐子の兄と同様に殺人事件に巻き込まれ、逮捕さ

れるが、径子の無罪を証明する肝心な鍵を桐子が現場から持ち去っていた。大塚弁護士は桐子に径子の無罪を証明してくれるよう懇願するが、桐子は事件現場に犯人が落とした証拠品のライターを提出せず、大塚弁護士に偽証を要求され、それを断つたために強姦されたという嘘の手紙を検事に送った。小説の結末において、大塚欽三は検事から示された桐子の手紙に反駁できず、弁護士の職を辞すことになり、桐子は東京から姿を消す。

まず、同時代の文学状況と清張が他の女性誌に連載していた小説を確認しておきたい。『霧の旗』を取り巻く同時代の文学状況に目を向けるとき、見過ごすべきではない点は一九五七年六月に刊行された三島由紀夫の『美徳のよろめき』による一連の「よろめき」ブームと姦通小説ブームである。藤井淑禎によると「同時代的には、少なくともミステリーの中などでは出張は浮気の記号」であり、「その背後には三島由紀夫の『美徳のよろめき』に端を発したよろめきブームがあることも見落とすこと」⁶⁾はできないとされる。また、清張の「よろめき」ブームへの興味は、一九五八年五月に『婦人公論』に発表された最初の評論「推理小説の読者」の内容からも確認できる。

以前ベストセラーとして話題となった『挽歌』や『美徳のよろめき』も主題は姦通である。文学的な視点や評価は別として、それが多くの女性読者に読まれたのは、姦通というサスペンスがあるからであろう。それが在来のモラルに抵触し、かつ、性と人間関係のサスペンスに関わっている

から興味をひくのである。姦通行為そのものにスリルがあることをのみがすことは出来ない。家庭の中に閉じ込められた日本の婦人が、それらの小説に惹かれたことは当然であり、「よろめき」という流行語が、多く婦人の側からもてはやされたのは心理的に分かるのである。

引用の部分から、この時期において、清張が「よろめき」ブームを十分に意識したことは明白であろう。さらに、作家個人の評論だけでなく、『霧の旗』とほぼ同時期、『女性自身』に連載されていた『波の塔』（一九五九年五月〜一九六〇年六月）もこの流行に合わせ、創作された可能性がある。『波の塔』は清張の膨大な作品群の中でも数少ない恋愛要素の強いロマンチックな作品の一つであり、人妻の結城頼子と若い検事小野木喬夫の禁断の恋愛関係を主旋律として展開しつつ、汚職事件、官界政界の醜態を暴く物語でもある。また、この時期に、清張が女性誌に発表した他の作品を改めて確認すると、同じ「よろめき」ブームの影響が随所に読み取れる⁷⁾。一見、『霧の旗』に登場した女性人物はいずれもこの「よろめき」ブームには当てはまらないように見える。しかし、「小説や映画、昼間のメロドラマなど（よろめき）ものの作品が女性たちに支持された背景には、妻や母として振る舞う日常からの脱出願望がある。（中略）日常からのつかの間の逃走によって自己の輪郭を確かめたいという試みだったの」⁸⁾であると指摘されたように、家庭内での生活しか生きるすべのなかつた女性たちにとって「よろめき」も

のは、新しい自立した女性を示す物語ともなっており、広い意味で女性の自立というテーマは本作と共通している。こうした点を掲載誌『婦人公論』の論調から確認してみたい。

『回顧五十年』⁽⁹⁾によれば、一九一二年に『中央公論』に入社した嶋中雄作は当時の劇や評論において一世を風靡した「個人主義的思想に伴う婦人の自覚と解放の思想」を意識し、一九一三年に『中央公論』の夏季臨時創刊として「婦人問題号」を発行した。「この臨時号が比較的評判が良かったからというのでもないが、時代の動きや青踏社の運動などに刺激され」た嶋中編集長は新しい婦人雑誌の創刊を当時の麻田駒之助社長に進言し、一九一六年「意識の高い女性」を対象とした雑誌『婦人公論』を創刊した。『婦人公論』は一九四四年三月号をもって廃刊されたが、一九四六年四月に「近代的女性確立についての強い問題意識」⁽¹⁰⁾を持って戦後改めて出発した。復刊された『婦人公論』は様々な制度の改革を实行了した上で、「新憲法が女性も含めた個人の尊重を基軸にしていることや、民法の改正による妻の財産権、婚姻の自由、女性の参政権の意義にふれ、権利の担い手としての女性の責任」⁽¹¹⁾を説いた。つまり、数々の激動の時期を経て、創刊から新たに復刊されるまでの『婦人公論』は「女性の解放」、「女性の自由」などの論調を提唱してきた。一九五八年には初めての女性編集長である三枝佐枝子が就任したことをきっかけに編集改革が行われた。この時期に、『婦人公論』は黄金時代を迎える。

こうした「女性の自由」と「女性の尊重」を唱える掲載誌の

論調を念頭に置き、『霧の旗』の女性作中人物・河野径子が初めて姿を見せた場面における、径子の「離婚」に関する描写を見てみよう。なお、河野径子に注目した先行論は、調査した限りでは見当たらない。

大塚欽三が、河野径子を識ったのは、径子が夫と離婚したいと法律的な相談にきたことから始まった。径子の夫というのは、別に始めた事業が成功してから放蕩^{ほうとう}をはじめ、それが彼女に我慢できなかつたからだ。

夫は径子に未練をもっていたが、彼女の方で拒絶した。一つは、夫の対手の女が妊娠したと聞いたからでもあるが、その断り方は頑固であつた。

夫は結局、径子の要求通り、銀座の料理店を手切れ金代わりに与えた。もつとも、その時の店は今の半分もはやっていなかった。夫は七百万円の現金を出すと言つたが、径子は断つて、銀座の店に固執したのである。その時、大塚欽三は径子に依頼されて、彼女の利益になるよう紛争を解決した。(五五頁〜五六頁)

ここで注意すべきなのは、大塚欽三が径子と知り合いになつたきっかけが、径子が夫の不貞を理由として、自ら夫と離婚しようとして、大塚弁護士に離婚手続きを相談したことだという点である。坂田吉雄が「戦後になつて、妻は法律によつて、西洋なみに、夫の不貞を理由に離婚を要求することができるようにな

った」⁽¹²⁾と指摘しているように、戦後という新しい時代における女性権力の向上及び離婚相談制度が大塚と径子との出会いを可能にしたと言える。

径子の例を、同じ時期に、他の女性誌に連載されていた清張作品の女性主人公たちの「離婚」と比べてみたい。例えば、『箱根心中』（『婦人朝日』一九五六年）の喜玖子の「離婚」については、喜玖子の夫雄治は女遊びの癖があつたため、喜玖子からは何度も別れ話が出たが、親類の年寄りに止められ、つい離婚できなかったと設定されている。また、『波の塔』（『女性自身』一九五九年五月〜一九六〇年六月）でも同様に、女性主人公の結城頼子は何人も女のいる夫と離婚したいと考えるが、夫はそれを無視する。「頼子から、別れたいという話があつたのを、横着に無視してきたのは、彼女を放さないためだった。頼子の中に、古風な倫理のあるのを彼（引用者注…頼子の夫）は知っていた」⁽¹³⁾。

つまりこれらの女性主人公には自ら離婚を決める権利と自由がないのである。前者の『箱根心中』の設定について、藤井は「離婚に踏み切れない背景としては、当時広く見られたように、女性の立場の弱さ、経済力の無きなども関係していたかもしれない」⁽¹⁴⁾と指摘している。『霧の旗』では、径子は夫の不貞が発覚した後、自ら離婚を切り出し、未練の残る夫の説得を頑固に拒絶し、決然たる意志を読者に示す。径子は手切れ金としての七〇万円より銀座の店の方を選び、別れた夫から引き継いだ当時は人気のなかつた店を有名な高級フランス料理店に作り変えた才能のある女性として描かれている。こうしてみると、径

子がいかに『婦人公論』の「女性の解放」と「婚姻の自由」という方針の代弁者として描かれていたかは明白である。また、径子という女性に注目することによって、『霧の旗』がどれだけ『婦人公論』の「女性解放」の論調と一致していたかもわかるのである。

三、桐子の孤独

大橋毅彦は、兄を亡くして上京してきた桐子が初めて働いたバー「海草」について、「『同郷』の絆を支えられた彼女たちの結合体のイメージが拾える」⁽¹⁵⁾として注目している。そして、このグループに「多くの人間が二気に押し寄せひしめきあい、荒廃の極みをとどめている大東京の中で、地方からやってきた貧しい女たちが生きていくためには、同じ郷里の出身ということ以外には何の後ろ盾も持たない私的な生活協同体を形成するしかなかつた」というリアリティを見出し、物語の発展とともにこのグループから身を引き剥がしていく桐子を、「故郷的なもの」との紐帯を断たれた人物と位置付けている。同じく『霧の旗』に映し出される地方から上京した人たちのグループに注目したものとしては、鶴田武志の論が挙げられる。鶴田は「桐子の復讐を支えるもの」について、「人をつなげるテクノロジー」と同郷意識」という二つの方面から説明できると述べ、「二つは孤絶が深まる都会の中でこそ大きな力を持つ」と主張している。特に、片瀬一男（集団就職者の高度経済成長）『人間情報学

研究』第一五巻、二〇一〇年)の「長距離の移動によって地縁・血縁や家族の支援を欠き、都市部で転職に有利な社会関係資本を剥奪されている」という集団就職の状況を引用し、「同郷意識」に基づいて作られた集団グループの「苦しく、出口は見えない」困窮する立場を指摘している。また、こうした同郷の集団就職が九州から上京した柳田桐子と杉浦健次の出会いを可能にしたと論じている。さらに、鶴田はこうした現象に対して、「一九五〇年代の東京という空間が、人々を孤独にしているという視座があるかもしれない」と述べ、高度経済成長期に上京した若者の孤独感に触れた。

ここで注意すべきなのは、上記の二つの指摘がともに昭和三〇年代都市に現れた「同郷」の集団に注目していることである。しかし、両者の着目点には微妙な違いがある。大橋は、清張がこうした現象を通して「故郷的なるもの」から身を引いた後の桐子の孤独を表象している、と強調している。一方で鶴田は、地方に居場所を失い、都市にある地方人の集団へ逃げ込むしかない桐子の窮屈な立場に重心を置き、清張が桐子と杉浦健次に代表される都市化の大潮流の中の普遍的な孤独を捉えていると指摘している。概括すれば、前述の二種類の孤独は、集団から離脱する桐子の個人の孤独と桐子という個人に投影された激変の時代における大衆の普遍的な孤独と解釈できるだろう。

桐子の孤独を社会学の観点から解釈した作田啓一の論点も示唆深い。作田は大衆社会においての桐子の孤独感に触れ、「いちばん表層には急激な工業化と都市化が生み出す客観的な孤独

がある。続いて他者の理解を拒絶する孤独の層があつて、これは心理学的にはふつう「強迫的独立」と呼ばれる層である。しかしこの層の奥には、もっと根源的な、そして心理学的な孤独もじつはそこに根ざしているところの、いわば実存的な孤独の層がある」⁽⁷⁾と述べている。作田は桐子が背負う孤独を三つの層に分けたが、この「三重の孤独」は前述の二種類の孤独を含んでいると考えられる。

では、テクストに沿って、桐子の孤独はどのように表現されたのかを詳しく見てみよう。

川本三郎は「清張の東京論」について、次のように指摘している。「松本清張は、東京をつねに地方からの視線で描く。弱者が強者を見る目で東京をとらえる。中央の権威、権力によって低く見られている地方の悲しみ、憎しみ、怒り、そして他方の憧れといった感情が複雑に交差し合」⁽¹⁸⁾。清張は数多くの作品において、読者に地方のローカル性を紹介しながら、東京の都市性も必ず登場させる。この地方と東京の対立関係が清張作品を読み解く際の定説となつている。地方人の眼で東京を観察する傾向と上京した地方人の孤独な気持ちも『霧の旗』という作品に表現されている。

中学校の修学旅行以来、兄のために、上京した桐子が見ている東京の風景は以下のように描かれている。

桐子は眺めていて、幻でも見ているような気持ちであった。実体の感じは少しもない。東京全体がぐすんだ灰色で、紙

の模型で見ているようだった。

帰り途には、もつと沢山な通行人にふえていたが、みなが同じような顔にしか見えなかった。(二五頁)

桐子が大塚弁護士からの連絡を待ったため、東京の街を彷徨する際の描写はつぎのとおりである。

銀座には煩わしい建物と人ばかりがあつた。地方にいて想像したことだが、歩いてみて、何の感興も起こらなかった。彼女に関係のない人ばかりが歩いてゐる。みんな裕福で、豊かな暮らしをしているようにみえた。女たちは、屈託がなさそうに微笑している。いや、もし事件が起こっても、八十万円の弁護士料ぐらい苦労なしに調達できそうな顔と服装をしていた。(二九頁)

また、桐子は大塚弁護士に弁護の依頼を断られた後の桐子の心象風景も注目される。

桐子はそこを離れた。あたりの景色が無意味に見える。白茶けて、まるで色彩がなかった。平べったくて遠近感が感じられない。地面がもり上がっていた。(二〇頁)

引用箇所から見ると、桐子の眼を通して、東京は「灰色」、「紙の模型」、「関係のない」、「色彩がない」というイメージで描か

れている。もちろんこうした景色は桐子の心境を映す一方で、都市に溶け込めない地方人の孤独感を鋭く表している。東京を見る地方人の視線は表層にある「客観的な孤独」及び高度経済成長期の大衆の普遍的な孤独に基づくものであり、これも清張作品に首尾一貫して流れている基調であるだろう。

小説の始まりの部分から、桐子は他人の関心を拒絶する存在として登場したと判断できる。泊まった旅館の女中に「何か、あの、面倒な事件でも？」と聞かれたとき、桐子は「え」と曖昧な言葉一つで口を閉じてしまった。「その稚い線の残った横顔が意外に冷たく」、女中に「距離を感じさせた」。また、阿部啓一に事件のことを尋ねられたときの、「女は黙ってかすかにうなずいた」、「女は眼をあげた」、「女はまた眼を伏せた」：そのことが、頬に残っている線といつしよに、いかにも稚いという感じを与えた」、「若い女は黙っていた。うなずいたようでもあるし、そうでなかったようでもある」、「それには返事はなかった。若い女は唇を噛んだようだった」、「困ります。今度は彼女は、はつきりと拒絶した」などの桐子の反応は実に興味深い。知らない人への警戒心はもちろん合理的なものだが、ひたすら他人に抵抗する態度は桐子独自のものである。他人との境界線を引き、この境界線を越えることを断固として許さない桐子は、まさに作田が提起した「強迫的独立」の層に立っている。前述した通り、ふたたび上京した桐子の「故郷的なるもの」に依存し、また未練なく、「故郷的なるもの」から身を引き剥がす行動について、大橋は「自由意志」に拠るものだと主張し

ている。単行本化された際の最終回の加筆は、『霧の旗』を「柳田桐子は、朝十時に神田の旅館を出た」という一文から始まり、「東京から桐子の消息が絶えた」という一文で締めくくる、首尾呼応する物語に転じさせた。一見するとプロットとしてのまとまりをみせるが、実は無限の異なった解釈が可能であるような「開かれた終わり」⁽⁹⁾の効果を巧妙に達成する。もちろん、小説のこのような終わり方は清張の他の作品にも読み取れ、すでに清張の技巧として定着しているとも言えるだろう。こうした結末の書き方も清張自身の体験とも重なっていると思われる。清張は「西郷札」のころで、

全部で八十枚くらいだったと思うが、七十枚になっても結末に近づいてこない。締め切りと枚数に迫られて、解決は文字にしないで、読む人の想像に託すという方法にした。芥川龍之介の小説（『藪の中』のことではない。たとえば『開化の夫』⁽¹⁰⁾）にもあることなので、まあ大丈夫だろうと思った。⁽¹¹⁾

と述べているように、よく結末の部分で「文字にしない、読む人の想像に託す」ことにより、かえって読者の関心を引きつけるといふ方法を利用している。加筆がもたらした内容上の効果について、次章で詳しく分析するが、こうした書き出しと締めくくりは「復讐物語」、「冤罪小説」と呼ばれている『霧の旗』をただ一人の女性の登場と退場に収斂していく巧みな効果を果

たしている。

『霧の旗』は桐子を主人公とする物語だが、実は桐子の目線からの直接的な描写は少なく、桐子は基本的には観察される立場に置かれていると考えられる。先行論で提起されたように、桐子の「毅然」「厳しい」「稚い」などの特徴は主に旅館の女中、記者阿部啓一、大塚弁護士などの第三者の観察によるものである。しかし、本章で考察した桐子に表象された孤独感、他者の観察からではなく、桐子自身の行動描写から析出できる特徴である。

四、桐子の人物像

前掲のように、天沢は「毅然」「厳しい」など、桐子の冷徹なイメージを語っている。しかし、作品に登場した旅館の女中、大塚弁護士、阿部、事件の弁護士など他者から観察される桐子は「毅然」、「冷徹」たる性格が付与されているだけではなく、「稚い線の残った横顔が意外に冷たく」、「いかにも稚いという感じを与えた」、「まだ少女のように年齢の若い、可愛い顔の女だった」が、視線が強かった、「頑な表情だが、顎の線が青っほく稚いのである」など、「若い」、「稚い」など少女らしさの特徴もまた強調されている。桐子は大塚弁護士に弁護の依頼を断られた後、兄が殺人の罪を負ったまま獄死し、更に、九州から上京してバーで働くなど厳しい現実と直面し、故郷を離れることになる等周囲の環境の変化も経験する、当然読者は、桐子の

多少の心境の変化を予想すると思われるが、「きれいだが、強い瞳だったし、相変わらず、眼の白いところには子供のように薄い青味がさしていた」（八六頁）、「少女の、あの芯の強さは変わりはない」と「少女らしさ」という点が終始一貫して描写される。「強さ」と「少女らしさ」というように、作品中では「強さ」と「少女らしさ」という点が終始一貫して描写される。登場人物の視点から、桐子は「少女のような女」であるイメージが定着していると見えるのである。小説の進行の中で、「少女」と「女」が同時に繰り返し強調されている点は見逃すべきではない。また、特定の空間で桐子が阿部啓一と大塚弁護士と再会する場面、例えば、阿部啓一がバー・海草で桐子と再会した時の「その背後が、洋酒の瓶を賑やかに飾った明るい棚なので、その女の姿は逆光で暗かった」（五九頁）、大塚弁護士がバー・リヨンで桐子を探した時の「小柄な女が、煙草の煙の濁ったうす暗い中から現われた」（二四七頁）、大塚弁護士が桐子の住んでいるアパートに行つて、ドアをノックした時の「電灯の光を背にした黒い桐子の顔が出た」（二五九頁）などの描写には、再度上京した桐子の「暗い」、「黒い」逆光の中にたえずむイメージが顕著に描写されている。

『霧の旗』連載中の『婦人公論』を紐解いてみると、性に関する記事の多さにその関心の高さが窺える。例えば、一九五九年八月号の『婦人公論』特集「性の氾濫を審議する」のヘッドラインでは「最近おびただしいマス・コミの発達とともに、その過当競争の手段としての性の氾濫が人々の

輿論を買っている。ここにこの現実を究明して、世の良識に訴える」とある。当然、誌面の統一感として、『霧の旗』など連載小説もそれらに連動してくることが必須となってくる。桐子とその純潔をもって大塚と対峙する場面は、そうした誌面構成と合致する。⁽²¹⁾

桐子の造型に関して、右のような指摘がある。しかし、『婦人公論』に連載されたテキストでは、最後の桐子が大塚と対峙する場面において、性に関する描写は明瞭ではない。性の過剰さは、連載中ではなく、単行本化された際の最終回の加筆によって表象されたものである。例えば、初出では

大塚弁護士に眼にベッドが映つた。

翌日、柳田桐子は、河野頼子事件を調べている検事宛に内容証明の手紙を送った。

「大塚弁護士が、昨日、深夜に訪れて、河野頼子の無罪を証明する偽証をしてくれ、と頼み、その懐柔のために、無理に自分に挑みかかって冒しました」というのがその主旨であつた。医師の診断書まで添付されてあつた。

という簡潔な描写で作品の結末を締めくくつてゐる。

これに対して、全集に収録された『霧の旗』の最終回においては、「大塚弁護士の眼にベッドが映つた」に引き続いて、「桐

子は、大塚の体に自分をぶつけるように真正面から襲い、彼を押し倒した。「先生が好き、この言葉と一緒に、彼女の手は大塚の白髪のでえた髪の毛を掴み、首を布団の上に固定させて、彼の唇や、鼻や、眼や、頬など、あらゆる部分を強烈に舐めまわした。咬みつくような唇の吸い方だった。歯を立てて、男の皮膚が破れそうなくらいである。先生が、好きだったの」といった性に関する描写が増加する。

また、検事宛の手紙は、「大塚さんはいきなりわたくしをベッドに連れこみ、肉体関係を迫りました」「わたくしは、自分の身体が老獪な弁護士のために踏みにじられたことを、ここで訴えているではありません。(中略)わたくしは一人の高名な弁護士の仮面を暴くため、あえて自分の恥をここに書き綴りました」など、大塚弁護士に強姦されたという嘘の訴えに満ちている。しかし、こうした意図的に嘘を記した手紙に対する、大塚弁護士の反応は実に興味深いものである。「弁護士は反駁の勇気がなかった」「大塚欽三は柳田桐子の復讐を知った。しかし、彼はこの文面を否定することが出来ない」。否定できない理由について、語り手は次のように説明している。「彼女の身体は純潔だったのだ。この罪悪感も弁護士に深い弱点となっている」「柳田桐子の手紙にある主張を否認し、自分の反論が正しいと立証するものは何もない。いや、それを反駁する勇気がないのは、自分の恥を晒すことよりも、彼が一人の少女の純潔を奪ったという罪の意識にある」。

ここで注意すべきは、桐子の大塚弁護士に復讐する方法及び、

誹謗されても、弁護士には反駁する勇気がなく、かえって反省するという点である。兄が真犯人ではないと確信した桐子は、兄が獄死した後、事件解明と真犯人を捜す方向に向かうのではなく、自分の怒りと恨みを弁護士に向けた。しかも、桐子は裁判に立つのではなく、自分の身をもって、つまり「女」という身分をもって弁護士への復讐を企む。大塚弁護士は「少女の純潔を奪ったという罪の意識」があるからこそ、偽りの控訴に反駁できなかった。言い換えると、基調としての桐子の「少女のような女」であるというイメージは小説の最後の設定と合致し、「少女のような女」であるからこそ、桐子の「大塚弁護士への復讐が成し遂げられるとも言える。飯田が指摘しているように『霧の旗』における桐子の「復讐は、性的な犯罪に引き込むことに寄らねばならない」⁽²⁾のである。

前述した鶴田は「桐子の復讐を支えるもの」を「人をつなげるテクノロジーと同郷意識」に帰結している。しかし、ここまで論じてきたように、桐子の復讐を支えたもう一つの側面はまさに大塚弁護士の「少女の純潔を奪ったという罪の意識」だと指摘できる。こうした罪の意識が成立するのは、当時「少女の純潔」が非常に価値のあるものだという意識が共有されていたからである。桐子は、自身の「少女の純潔」なるものが他者から見たときに価値あるものであることを十分に理解していた。しかも、「稚い」「若い」など、男性の欲望の対象になるような「弱い」性質を逆手に取ったわけである。「少女の純潔」崇拜が一般的であった時代に、清張が「純潔崇拜」を利用するよう

な女性像を描き得たことは、革新的であつたと言える。しかし、その一方で、「少女の純潔」の価値は高ければ高いほど、桐子の復讐の意志の壮絶さと理不尽さが強調されてくるのである。「霧の旗」は、「少女の純潔」はかけがえのないものだという価値観を、強化・再生産する側面もあると言えるだろう。

したがって、清張は連載当時の掲載誌におけるマス・コミ批判としての「過当競争の手段としての性の氾濫」という主張を受け、桐子を描いた際に、露骨な性的描写を抑制し、後に、連載前半部分で作り上げた桐子の「少女」と「女」のイメージとを統一し、「少女の純潔」を利用して復讐をなし遂げるというプロットを成立させるために、作品を単行本化した際に、性的描写を中心とした大幅な加筆を施したのではないだろうか。また、単行本化された際、連載当時より男性読者が多くなることが予想される。こうした具体的な性行為や桐子の身体を読者に想像させる性的要素を加筆したことは、男性読者を喜ばせるためという作家意識もうかがわれるのではないだろうか。

五、終わりに

当然ながら、「霧の旗」を他の側面から解説する余地はあると思われる。例えば、「霧の旗」の連載の第一一回、一二回、一三回、一四回、(全集第四回)は「公判記録、検事の起訴状、実況検分書、鑑定書、解剖報告書、捜査報告書、検証調書、聴取書、供述調書、各証人供述調書、判決文、弁護士弁論要旨」

などの裁判関連書類によって構成されている。こうした詳しい記録は当時の女性読者に対して、生々しい裁判という現実を知らしめる役割を果たしていたとも言えるだろう。また、「霧の旗」に取り上げられた二つの事件からは作者の冤罪事件への強い関心もうかがわれる。しかし、本稿はあくまでも『霧の旗』が提示した女性像を中心に考察を試みたものである。

長年にわたる清張の編集者を担当していた中央公論社の宮田稔栄は、清張が今も女性読者に支持される理由について、次のように指摘している。「悪女モノ」でも人間の根つこの部分を描き出しています。悪事の裏には必ず要因がある。だから追いつめられたら自分も同じことをするかもしれないと思わせ」⁽³⁾。河野径子と大塚弁護士を理不尽な境遇に陥れたのは桐子だが、桐子は悪女のように描かれていない。むしろ、両親も既になく、家族としての兄も失い、故郷を離れて、東京で水商売をする桐子の孤独感について、我々は共感し、また共有するのではないだろうか。桐子の「毅然」「厳しい」「稚い」などの「少女」と「女」を兼備する複雑かつ個性的な特徴が、清張作品に新しい女性像として登場することになったのである。さらに、「少女の純潔を奪った」という罪の意識」を利用した復讐というプロットを採用することで、当時また一般化していないジェンダー論的問題を『霧の旗』という作品に取り込んだと言えるのではないだろうか。

【注記】

- 1 清原康正「松本清張・作品ガイド」『国文学 解釈と教材の研究』學燈社、一九七三年六月
- 2 飯田祐子「清張の、女と因果とリアリティ」『現代思想』三三(三) 青土社、二〇〇五年
- 3 石川巧「悶々とした日々への復讐——清張ミステリーの女たち」『叙説』花書院、二〇〇九年一月 取り上げられた初期作品は主に「火の記憶」(題名「記憶」を「三田文学」一九五二年三月に発表したもの、改題改稿「小説公園」一九五三年一〇月に発表)「張込み」(小説新潮)一九五五年一月「箱根心中」(婦人朝日)一九五六年五月「九十九里浜」(新潮)一九五六年九月「愛と空白の共謀」(女性自身)一九五八年二月「二階」(婦人朝日)一九五八年一月「氷雨」(小説公園)増刊 一九五八年四月「紐」「危険な傾斜」(オール読物)一九五九年二月「一年半待て」(週刊朝日)別冊 一九五七年四月「点と線」(旅)一九五七年二月「鬼畜」(別冊文藝春秋)一九五七年四月)などである。
- 4 橋本忍『霧の旗』(解説)角川文庫 一九八一年 二六九頁〜二七六頁
- 5 天沢退二郎『霧の旗』をめぐって』『松本清張研究』(四) 砂書房、一九九八年四月
- 6 藤井淑禎「清張ミステリーと女性読者——女性誌との連携を軸として——」『清張 闘う作家——「文学」を超えて——』ミネルヴァ書房、二〇〇七年八月
- 7 例えば、『箱根心中』(『婦人朝日』一九五六年五月)、『遠くからの声』(『新女苑』一九五七年五月)、『愛と空白の共謀』(『女性自身』一九五八年二月)などの作品において、主人公の設定とストーリーの展開には
 ほぼ同時代の「よろめき」ブームと女性誌の論調が読み取れる。
- 8 中元さおり「三島由紀夫「よろめき」論——(よろめき)ブームから読む——」『広島大学大学院文学研究科論集』(七二)、二〇二二年二月
- 9 嶋中雄作「回顧五十年」中央公論社、一九三五年、一七頁
- 10 古河史江「戦後『婦人公論』における「女性解放」論——一九四六年・一九五五年——」『歴史評論』丹波書林、二〇〇三年四月
- 11 同前
- 12 坂田吉雄「戦後の夫婦生活と離婚」太田武男編『現代の離婚問題』有斐閣、一九七〇年八月、二九頁
- 13 『松本清張全集』(二八) 文藝春秋、一九八五年、二四六頁
- 14 前掲 藤井
- 15 大橋毅彦「(なつかしさ)と(空虚)と(実感)と——昭和三十年代の松本清張・水上勉文学の意味づけ——」『文学』岩波書店、二〇〇八年三月、四〇頁〜五三頁
- 16 鶴田武志「無力化された真相の先に——松本清張「霧の旗」に見る更新されない日常の正体——」『松本清張研究』(一八)、二〇一七年
- 17 作田啓一「大衆の中の孤独『恥の文化再考』」筑摩書房、一九六七年、五九頁〜七二頁
- 18 川本三郎「地方から東京を見た、清張の東京論」『東京人』都市出版、二〇〇六年五月
- 19 廣野由美子『批評理論入門——「フランケンシュタイン」解剖講義』中央公論新社、二〇〇五年三月、一一〇頁
- 20 松本清張「西郷札」のころ」『私のものの方考え方』、学陽書房、一九九八年六月(初出『週刊朝日』増刊)、一九七一年四月五日)

- 21 前掲、鶴田
- 22 前掲、飯田
- 23 佐野眞一・宮田穂栄対談「、怨念の人、松本清張が今も女性に支持される理由」『婦人公論』二〇〇九年二月
- (九州大学大学院地球社会統合科学府博士後期課程一年)